

表紙モノ語り

クバ王国の摂政の衣装

民族：クバ 国名：コンゴ
1991年収集、H0179278ほか



吉田 憲司

民博 文化資源研究センター

コンゴ民主共和国の中央部、コンゴ川の上流域に位置するクバの王国では、古くからラファイア椰子の繊維を用いて布を織り、刺繍布やアップリケ布が制作されてきた。とりわけ、王やその親族、貴族たちは、男女を問わず、さまざまな儀礼の際にそれらの布を組み合わせた豪華な衣装一式を身にまとう。さらに、それらの人びとは、死に際して、その人物がそろえた衣装の中でも最も豪華な衣装を身に付けて埋葬される。

ここに示したのは、クバ王国の摂政の一人が整えた衣装の一式である。一九九一年、クバの王宮との直接のやりとりの結果、みんぱくのコレクションとなったものである。クバの刺繍布は、ビロードを彷彿とさせる質感をもつことから、日本では草ビロードの名で知られてきた。平織りのラファイアの布に、裏から同じラファイアの繊維の糸を刺し、表にわずかのたわみを残して裏へ差し戻し、あとから表に出た糸を切りそろえて毛羽状にしたものである。一方、ラファイアの布にアップリケを施す技法は、もともとは擦り切れた部分や穴を伏せるために始められたものであるが、後に、布の装飾の方法として広がっていった。

クバの刺繍布は、ビロードを彷彿とさせる質感をもつことから、日本では草ビロードの名で知られてきた。平織りのラファイアの布に、裏から同じラファイアの繊維の糸を刺し、表にわずかのたわみを残して裏へ差し戻し、あとから表に出た糸を切りそろえて毛羽状にしたものである。一方、ラファイアの布にアップリケを施す技法は、もともとは擦り切れた部分や穴を伏せるために始められたものであるが、後に、布の装飾の方法として広がっていった。

ヨーロッパからもたらされた素材も組み込まれている。それらの組み合わせによって、過剰ともいえる出で立ちが出来上がる。アフリカでは、衣装は、身を守るものである以上に、それが身につけられる機会の神聖さや、それを身につける人物の社会的地位を示すものとなってきたのである。

